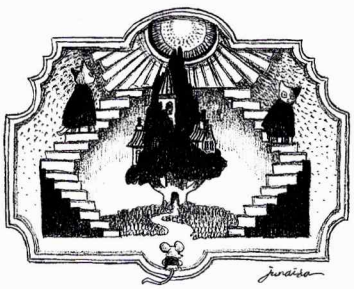
朝日 俳壇 歌壇



〈日曜日のブローチ　16〉　junaida

俳句時評　若き俳人の模索

岸本　尚毅

〈橋に鳩マフラー貸してそれっきり〉〈売れ残る金魚のやうに夜を遊ぶ〉〈夜桜や遊具の上のおとなたち〉〈卒業の頃からずつと工事の駅〉〈僕ら残像白シャツを脱ぐ脱がす〉〈山焼く日つねの遠目のぬひぐるみ〉は、大塚凱『或』（ふらんす堂）から引いた。

返って来ないマフラー。売れ残った金魚。夜の遊具にいる「おとなたち」。卒業して何年経っても工事中の駅。「残像」となった「僕ら」。遠くを見るぬいぐるみの眼。過ぎゆく青春を慈しむように詠む大塚は一九九五年生。

このような大塚の句を叙情で括るのは早計だろう。踏絵を通じて人間性を穿った〈踏めば絵の見えなくなると唆す〉、人の意識それ自体を描出した〈眼は次の草を見てゐて草むしり〉、静謐な空無感を表出した〈おもかげのなくて水澄むべンチかな〉など、俳句表現の可能性を探り続ける大塚は、自身の青春の叙情さえも俳句の契機として意識的に対象化しているかのように思える。

〈夕星や梅の香深く梅の陰〉〈鱈売るや身と腸をひと笊に〉など端正で緻密な作が目をひくのは、一九九八年生の若林哲哉句集『漱口』（文学の森）。大塚と対照的に、若林は近代俳句の培って来た方法を磨くことに傾注する。八手の実の思わぬ美しさを発見した〈黄砂ふるつややかなるは八手の実〉や、冬のはじめの静かな殺戮を詠んだ〈蜘蛛が蠅喰ふ石蕗の花の上〉などは伝統的な写実の手法で得た新鮮な作。大塚、若林にかぎらず若い俳人たちの模索は続く。刮目して見守りたいと思う。

（俳人）

川野里子選

☆よく見ればほんとは怖いパンダの目日本のこ
としかと見ていた　（つくば市）小林　浦波
五時間目剣道の面はずすときおでこと首に七
月の風　（奈良市）山添　葵
ビルの谷の曇天を指し「空はここ」と言って
るようなパーキングの〈空〉
（横浜市）森　明子
ベッドより車椅子にわれを移し終え腰をさす
るをひそかに見たり　（北本市）横田　静枝
泣きながらエレベーターに乗りし子の泣き声
下へ下へと向かう　（長崎市）牧野　弘志
敗戦後市場に見つけた鰛玉光る白さに泣け
たと亡き母　（西宮市）坂本　栄子
猛暑日の字面を見れば〈熱気〉さえ突進して
くる熊のごと見ゆ　（盛岡市）内藤　賢一
☆島民が地震のさまを語るときアカショウビン
のこゑ重なりぬ　（富田林市）芝田　敦
こっちには戻る気はないと言う息子旅人のよ
うに富士を撮りたり　（富士市）中馬　裕江
死んでいるトカゲの尻尾失せていて逃げきれ
なかった踏んぼった四肢（広島県）吉田　順子

【評】一首目、帰って行ったパンダの真っ直ぐな目は怖いほど真実の見える目だったのかも。二首目、心も防具を外して風を感じる。三首目、ビルの谷間の駐車場も「空(そら)」が恋しいのだ。四首目、介護の大変さを介護されながら見る辛さ。

佐佐木幸綱選

ひび割れの田に水入れてよみがえる命に鷺の
急降下する　（越谷市）畠山　水月
二張りのテントにコンテナかき消えて夏草ゆ
れるサーカスの跡　（枚方市）小島　節子
一両の電車が走り一両のホームだけある駅に
停まった　（札幌市）橘　晃弘
表札は十五のポストに三つのみ全室にヒト息
を潜めて　（印西市）小野　千尋
徘徊といふ語悲しも今日よりは旅のお人と呼
ぶことにせむ　（新座市）山城千恵子
母の棺に俳句を書いてくれし人辻桃子さん逝
く母より若く　（豊橋市）坂部　さち
女高生の力漲るふくらはぎ立ち漕ぎで行く七
月の坂　（つくば市）藤原　福雄
少しだけ未来を生きる翌日の記事にまだ朱入
れをするデスク　（熊本市）貴田　雄介
父母の形見の品を争ひし兄弟もみな亡くなり
にけり　（横浜市）本間　勝
幹事嘆く固定電話の解約で同窓会の連絡付か
ぬと　（吹田市）小山　安松

【評】第一首、今年は早くからの酷暑で、田の水の管理が大変だったようだ。第三句以下、鷺をクローズアップして、うまい。第二首、サーカスの一団が去った後にスポットを当てて独特、第三首、過疎地の駅をクローズアップする。

高野公彦選

こんなにもグルメ番組多いとはガザの人らに
とても言へない　（東京都）上田　国博
工事現場小太りに見える人がいる空調ベスト
着る人増えて　（福島市）亀岡　広子
蠅叩き蠅もいないし捨てようが怒って使う家
人もいるし　（千葉市）鈴木　一成
十本の手縄の先のそれぞれの鵜に合はせたる
鵜匠のさばき　（本巣市）青木　鈴子
モンゴルに一七〇〇人の無念の死ありしを教
える両陛下の訪問　（安中市）鬼形　輝雄
リビングの床でうたた寝してる子の髪はプー
ルの塩素の匂い　（奈良市）山添　聖子
稲妻が走る瞬間目が合ひて生徒とわらふ試験
監督　（西条市）村上　敏之
ハンカチの上にねむれるキジ猫よ汝が飼主の
かをりを恋うて　（川口市）河原ゆり子
夕食後「今日何したっけ」妻に問ふ退職して
から始めた日記　（青森県）中村　範彦
悪い歯もタバコ臭さも照れ性もすべて隠せる
マスク外せず　（滋賀県）木村　泰崇

【評】1首目、ガザで飢えている多数の人々への〈すみません〉の気持ち。2首目、今年の猛暑を浮き彫りにした歌。3首目、下句がユーモラス。4首目、十羽の鵜を操る鵜匠の見事な手捌きに感嘆する作者。10首目、マスクにはこんな効用が。

永田和宏選

めずらしい生物扱いしておいて今更理系に女
性をなんて　（神戸市）田崎　澄子
☆島民が地震のさまを語るときアカショウビン
のこゑ重なりぬ　（富田林市）芝田　敦
朝の潮わけゆく船の両サイド海豚の伴走はじ
まりて夏　（垂水市）岩元　秀人
雲海の利尻横目に尾根の道朝日眩しき白山一
花　（小城市）福地　由親
「パイロット目がけて石を投げつけた」叔父
の空襲の昔話　（高松市）島田　章平
「トランプを刺激しない」が外交の要諦らし
い繁るどくだみ　（東京都）十亀　弘史
☆よく見ればほんとは怖いパンダの目日本のこ
としかと見ていた　（つくば市）小林　浦波
「あれがヴェガ、あれアルタイル」背中越し
指さしにけりあの夏君に
（さいたま市）大浦　健
AIの思う壺ではないだろかあれもこれもと
委ねる人類　（長崎市）田中　正和
東西でニュアンス違うバカとアホ大阪でバカ
といったら大事　（船橋市）佐々木美爾子

【評】田崎さん、かつては稀少生物を見るような眼で見ていた癖に、今ごろになって理系女子を増やせなんてと、あの時代を知っている女性の眼は厳しい。十首目、関西で「アホやなあ」はむしろ信頼感を表すが、「バカ」などと言おうものなら。

「朝日俳壇の選者とともに」参加者募集　朝日カルチャーセンター新宿教室主催で、4選者との交流会。9月23日午後1時30分から、東京都新宿区西新宿2の6の1　新宿住友ビル10階で。作品を募り（未発表の2句、9月2日締め切り）、4選者が公開選句で特選と入選を決める。参加費は5665円。オンラインでも同額で参加できる。申し込みは、教室のHPから。問い合わせも教室（電話03・3344・1941）へ。

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます（選び2作品まで）。QRコードから